



實驗上の育兒法 (承前)

醫學博士 瀬川昌耆口述

襟袖と虎子と布圍

▲おむつの扱ひ方 今度は「おむつ」の事をお咄致さうが之れも木綿で造つたのを宜いとするので、一巾物で長さを二尺にするか又左もなくば四尺の長さにして夫れを輪にしても宜しい、輪にしたなら乾すとき竿へ通すに便利があるから之れは何方でも都合の宜き方を採用が宜からう、處で夫

れをば二三枚重ねて生兒の腰の下へ横に敷き、其の外に一尺巾の布を一尺の長さに切つて、今横に敷いた「おむつ」へ縦に覆せて股挟みにする、普通股挟みは半巾ものを用ゐるが、日々取扱つて見ると矢張り一巾もの方が廣い丈誤つても着物などへ汚れ物が附着せず却つて便利である、夫れから尙注意するのは其の股挟みの上に軟い半紙を敷き夫れへ大便を受けると一層取扱ひの上にも便利があるし、又大便の性質も克く鑑別が出来る故生兒の病氣の時などは直ぐに容易く發見する事の出来る便益がある

▲おむつとおかわの臭氣止 何れの家庭でも「おむつ」を二三回使用したら直ぐ棄てる者はあるまい、處で大小便を受ける「おむつ」であるから如何に湯や水で洗つても其の臭氣は薩張りとは抜け

ない、之れには随分お困りの方もあらうし遂に「おひつ」は臭い物だと諦めて居る方もあらう、去れど其の臭氣を抜く方法があるのです、即ち一旦湯なり水なりで奇麗に洗つたら其の跡でカマンガンサンカリ溶液をもつて精根におゆすぎなさい、此のカマンガンサンカリと云ふ薬は何れの藥種屋にもあつて又誰れにも賣る極く安値な薬です、夫れを十錢も買ふとナカ／＼澤山あるし綠色に色の付いた稀薄な溶液で充分臭氣が抜けるのです此の方法は別に手數も懸らず「おひつ」をゆすぐ時に難作なく誰れにでも出来る事ですから試用して御覽なさい、此方法で「おかわ」をお洗ひなさい、洗ふと矢張り臭味が抜けて不快を感じるものでなくなりませす

▲布団と湯たんぼ 次には生兒を寝せる布団だが

三十二
 之は成丈け軟いフワ／＼した布団が宜いし、枕は中へ綿を入れて造りフワフワした軽い物を被て全夜に休ませる工夫を仕なければならぬ、冬季は生兒の頭へは眞綿でつくつた頭巾を冠せるやうになさい、夫は頭の冷ぬ爲である、夏なら生兒の身体が冷る事はないけれど冬は兎角に冷え易くて困る先寒中なら被けて置いた夜具と生兒の身体の間へ手を入れてボカ／＼仕て居れば心配は無い、併しボカ／＼温く感じなければ必ず湯たんぼを入れて冷えぬやうな趣向にするのだが、夫れには左右兩側と足部との三箇所へ入れなければ湯たんぼの効能がない、若し湯たんぼが無ければ麥酒の空櫃に湯を注いだので代用が出来る生兒の身体は徐々と冷えるものであるから寒い時など油断して既に冷却した以上は扱ナカ／＼温たまらず遂には救ふべから

ざるに至りし例は是迄澤山あつた

母子同衾の利益

▲母子同衾の説明 育兒の事に就て親達のお尋ねに折々斯ういふ御質問があります「小兒が母親と同衾するのは實際害のあるものであらうか又害があるとするれば健康上に何の位影響を來すものであるか」と云ふ母子同衾の問題に迷ふ方が澤山あるやうです、が之れは西洋では初生兒の頃から母親の床へは寢せない習慣で、西洋の書物には同衾の弊害が記してあるから自然斯ういふ説が我國にも矢笠しくなつて來たのです、去れど西洋でも母子別々に床に眠るのは中流以上の家庭に實行され下等社會は事情が許さぬので孰れも日本のやうに同衾されて居るのです、抑此の同衾は從來日本人の間にも習慣となつて居るが、母親が或る一定の注

意をする以上は却つて母子同衾する方が日本人の爲めに利益が多いのです

▲冷えるのが大禁物 日本人に此の同衾の利益ある事は我國の家屋構造と密接の關係があるので、西洋の家屋は御存じの通り室内の温度が晝夜平均を保つ事の出来るやうに建築されて居るから夏の氣候では兎に角、冬の空氣にも獨りで寢させた處で生兒の身体が冷えて凍える様な憂ひはない、夫れは室内の温度が保たれて温たかく、冷めたい、感じがないからであるが、日本の家屋は夫れと反對で、冬になると室内の温度を保つ事が出来ない夫れ故日本では小兒を別に寢せるには床を充分温める工夫をして、夜分は絶えず此の温みの消えぬやうに油断なく注意しなければならぬ事と、モ一ツは小兒の眼が醒めた時乳を飲ませるに是非母親

が一旦自分の床へ連れて来て、飲ませ終つたら又小兒の床へ返すのであるから、此の時間を要する中にも小兒の身体の冷えぬやうにしなければならぬ、小兒には冷えるると云ふのが衛生上第一の禁物であるにも係かはらず、日本家屋の構造では寒中温かに小兒を一人で安眠させるには其手数が莫大なる上時には体温を冷却せしめる危険が屢々あるから、此危険を思へば日本人は母子同衾を矯正する杯の事は未だ迎も實行の出来ぬ事で、同衾すればこそ一般の小兒を満足に育てられる利益があると云ふを憚らぬのであります

▲小兒室息の例多し 然らば母子の同衾に於て小兒の健康上何れ丈の害があつたかと云ふに、之れを認めて其の害を摘記する程の事は無い、只寢坊な母親は小兒を乳房で室息せしめて死に至らしむ

多くの例が度々あつたし、之れは日本のみならず西洋でも同衾する下等社會には斯る母親の失策は屢々耳にする處である故、同衾して育てる母親は乳房を小兒に含ませた儘寢ないやうに之れ丈は特に注意を與へるのであります

▲生兒の寢室 産婆が生兒を取揚げてから寢せるには何ういふ室を撰ぶかと云ふに、夏なら風通し宜く涼して華氏六十度位の温度の室なら結構であるし、冬ならば温かくする事が第一肝要な事である、夫れから家が狭ければ母の産室でも差支ないが室内は餘り明るきは避け、薄暗くして周圍を静にし、産れて後暫くの間は生兒の精神身体を休息させなければならぬ事を序にお咄し置くのです

兩便と新乳

▲胎尿 お咄しは段々進んで産湯を浴はせ、産衣

を着せ、襦袢を施し、小兒布團を敷いて一室に安眠させる迄に及んだが、生兒は茲で良い心持にスヤ／＼眠るのである其の間の時間は一定せぬが二時間から五時間位は目が覺めない、爾うして暫く経つと泣いて目醒めるが、其の際には必ず大小便のために汚れて居るから夫れを取換へて心持ちよくさせれば又スヤ／＼と眠る、此時の大便は胎屎として俗に「カニバツ」と云ふが成分も性質も普通の便とは違ひ眞黒でドロ／＼した丁度飴のやうなものだ、之れが生れてから二日乃至三日位は通利するので夫れが畢つて普通の便となるのだ

▲一時は体量を減ず 小便是乳を飲まぬ先さから放尿ので生れて數日間は段々目方が減て行く、此際生兒の經驗なき者は驚いて「斯う目方が減ては育つまい」と非常に心配する者もあるが之れは自

然の理で決して案ずるに及ばぬ事、一週間も経てば舊に復し次第に肥滿するのである

▲汚水を吐逆す 夫れからまだモ一ツ經驗の薄き親達の驚くことがある、夫れは生兒が産れて間もなく闇黄色の汚水を澤山吐く事で、吐血でも仕たのではあるまいか、何んな恐ろしい病氣になつて命迄も危ふくはなるまいかと非常に恐怖して狼狽する事があらうが、此の汚水は生兒が産道を通過するときに胃へ停滞し居るから生れると間もなく夫れを吐逆して仕舞う、之れは決して驚くに足らぬのみならず汚水を悉く吐いて仕舞へば跡は唯ケロ／＼と治癒して生兒の平生に復すのである尤も之れは或る生兒に限る事もあるが萬一此の嘔吐が頻繁なる場合には素より醫師の診断を仰がなければならぬ昔は斯る汚水の氣遣はしければとて態々

吐劑を用いた例もあるが之れは必要でないから用ふるには及ばぬのである

▲砂糖水を與へよ 生兒は出産後十二時間乃至二十四時間位は一時眼が覺めて泣いても亦スヤ／＼眠るが、之れは別段飢を覺えないから従つて母の乳汁も二十四時間迄位は能く出ない、況して初産の婦人にあつては尙更の事である、ソコで母の乳も未だ出ず、生兒は空腹になつて頻りに泣出したなら泣かして置いても別段生兒の健康を害なう様な事はない、が若し何か飲み物を與へずば氣が濟まぬなら薄く溶いた砂糖水でも與へて置けば宜しいしヨシ其の時母の乳汁は出なくも生兒に吸はせるのは必要な事である、昔は母の乳汁を吸はせる前に未久利を飲ませる事は殆んど一般の例になつて居つたし、今日でも未だ此の未久利を飲ま

せる事は見受けられるのみならず初めの乳汁は三四日位迄新乳と稱へ之れは生兒に飲ませると毒になるとして搾つて捨てた者だが之れは大間違ひな誤解である未久利と新乳との關係は次に述やう(續)

元祿料理の一節

石井泰次郎

煮物の拵方

◎山の芋のわけもの

薯蕷を洗ひて、皮をむきて、山葵卸にてすりかゝりし、搗盆にてすりて、午莠を五六寸づゝに切りて、湯煮よくして、たてに切目を一所入れて、其所から細竹串の先にて、皮を左右へひらきて○尤も其前に小刀にて、兩方の小口の皮と肉との間を切めぐらして、皮のへぎよき様になしおくべし、皮を